

第一回「文芸思潮」エッセイ賞発表

第一回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで全国および外国から一六五篇の作品が寄せられ、力の入った作品が彩り豊かに揃い、たいへん充実した選考となりました。心から御礼申し上げます。

応募作の中から、まず選考委員会予選担当による第一次予選、第二次予選が行なわれました。それに通過した作品が、さらに三神弘、福岡哲司、水木亮、五十嵐勉の各選考委員により、第三次選考、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。

なお、奨励賞、また多くの方に読んでいただきたいそれに準ずる作品は、順次「文芸思潮」または「文芸思潮」ウェブに掲載させていただく予定です。御期待下さい。

第二回「文芸思潮」エッセイ賞は明年二〇〇六年も今年とほぼ同じ要領で募集を行ないます（締切は四月三〇日とし今年より三カ月早くなりましたので、ご注意ください）。どうぞ奮って御応募ください。

選評

日々の営みと

「ペンの時間」

三神 弘

第三次選考として、八十八作品と出会うこととなった。さまざまな場に、書くべきものをもつ人たちがいることを知るとともに、読むうちに、聞く、という心もちにさせられた。つまり、どの作品にも、声がある。また、エッセイという形式への熱意も、試みも伝わってきた。

たとえば、企業のリストラと「いじめ」の実態を報告し、働くことの意味を問う作がある。肉親の遺品であるノートを読むことで、在りし日にもうひとつの感慨をもつ作がある。倒産を目の前にした商店主のひたすら日々と、決意を示す作がある。震災の体験を振り返り、救援してくれた人たちへの感謝を新たに作る作がある。

また、ニュースの事件を身に寄せ、「彼は私だったかも

「文芸思潮」エッセイ賞

当選 「ヌヌ」 本間美紗子

優秀賞

「十六歳の闘い」 印南房吉 いんなみ

「風の機微」 内海 航 うちみ

「サツマイモ」 たま きよし

「萱草」 安田ひとし

「ホップ・ステップ・ジャンプ」

あすわ 足羽りよう

奨励賞

「我が癌戦争——ホスピスを求めて」

佐藤朗子

「藤枝垂れ」

えなみきくみ 榎並掬水

「姉」

くるしま 来島 徹

「不思議な4」

葉月もえ

「フェンス越しの語らい」 佐藤たまき

「森の人」

ひろき 平山浩己

「妻の夢」

原 武彦

「夕立のレクイエム」

これぶみ 高橋惟文

「化粧品の裏事情」

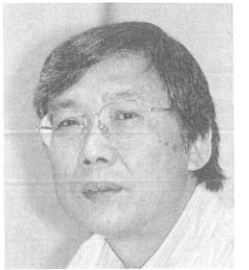
ほおつき 朴月あゆか

「出版物の陰で」

田中勁一郎

「私と足のはなし」

峰谷マチ子



三神 弘

みかみ ひろし

作家
1945年山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982年「三日芝居」ですばる文学賞
受賞
著書「三日芝居」「花供養」「月と五
人の男」

知れない」と、事件の社会性について論じる作もある。難病の体験をとおして、救済の方法を助言する作もある。都市化と混住で、人間関係の不信、関係のもちようのなさを憂う作もある。

寄せられた作品は、日々の暮らしと、出来事に表現を与え、まさに「現代」を垣間見せてくれる。どの作品にも、作者の言葉が伴い、呼吸をしている。「感動の仕組みづくり」に腐心することもなく、平明であり、平明さは、また、作者の獲得している経験に由来している。作者の「ペンの時間」ともいふべきありようを知ることでもある。

当選作の本間美紗子「ヌヌ」は、入植地の一家の少女と、生活の糧として飼育する鶏との交流をとおした成長記である。少女は「掘っ建て小屋に九人の家族」と「ランプ一

な少年の体験は、それゆえに、悲惨だ。一人の少年の戦争、ともいふべき姿が、死臭の焼け野原に友人を探したこと、軍事教練で靴の代わりに裸足に墨を塗ったこと、知人の実家の製粉店を訪ね何年ぶりかで白い飯を食ったこと、などをおして迫ってくる。戦争体験を「出発点」と振り返るしかない今日の身辺も語られる。

優秀賞、奨励賞は、いずれも読み応えがあり、編集部に掲載をお願いした。「文芸思潮」が、日本語の「今日」を広く明らかにしていく場であることに期待したい。また上位作品とはならなかったものの、和木亮子「私の点と線」、大野水繪「四畳半のプラネタリウム」、あきこ「帰郷ノ切手のない手紙」、峰谷マチ子「私と足のはなし」に注目したことを報告しておきたい。

ここにひとがいて、

時代がある

福岡哲司

選評
終戦記念日は終わっても各地で「戦争を語り継ぐ」企画が後を絶たない。「戦後六十年」の「節目」の年で、しか

つ」の生活をする。「耐え難い冬から解放される春は、我先に母の長靴を弟と奪い合い、泣く弟を尻目に、狭い家の中から飛び出した」とある。少女は怪我をしたひよこの世話をし、やがて、ひよこに「ヌヌ」という名前を付け、親しさを増していく。

ひよこの「ヌヌ」への愛情と、観察は、しだいに、家族や、その暮らし、さらには、自分自身を知る眼を養っていく。「ヌヌ」を失い、新しいひよこを「ヌヌ」と名付け、呼んだが「逃げてしまったり」「啄いたりして」、「普通の鶏にすぎなかった」とある。作者は、少女の眼差しを取り戻し、それゆえに過不足のない表現を得ている。

優秀賞の内海航「風の機微」は、単身赴任者の暮らしの関心が、仕事や人間関係にではなく、雨や風の引き起こす出来事に譲られていく過程をたどる。あるいは、雨や風の力学と見えていく都市生活の雑駁さ、といってもよい。

たまきよし「サツマイモ」は、都市化で壊れていく風景と、失うわけにはいかない記憶の風景を描き、人もまた、風景であるかの感慨をもたらず。安田ひとし「萱草」は、「ピーピー草」と名付けられて見向きもされない野草に惹かれ、その俗称を解き、「正体を突き止め」ていく。やがて俗称の先に、蘇る記憶もあれば、歌もあり、逸話もある。

印南房吉「十六歳の闘い」は、東京大空襲と、下町の少年の見たもの、聞いたものの、報告である。素朴で、健全

も、憲法や教育基本法が「崖っぷち」にあるという。

どうしてこうなのかと私は思う。あの戦争だって「合法的に」始めたのだし、遂行された。「崖っぷち」だって昨日今日いきなり直面したわけではあるまい。六十年かけて国民に支持され、議会政治のワクの中でここまで来たのじゃないか。皆が賛成した戦争だし、戦後だし、現体制なのだ。

「語り継ぐ」ことには意味がある。一方、教育、軍隊、憲法、戦争責任、天皇制……を巡って論客が縷々語る企画もある。こうした大情況をめぐってナタを振るって我々のところに響くだろうか。タテマエやきれいな事と言ってひどければ、観念的と言おうか。戦前、戦中、戦後を通してこう



福岡哲司

ふくおか てつし

1948年生れ
山梨県立図書館長
樋口一葉研究会員
著書『評伝深沢七郎ラブソディ』
(TBS ブリタニカ 第3回開高健賞
奨励賞)『遠い散歩近い旅・山梨文学
散歩』(山梨ふるさと文庫)ほか
ホームページ「遠い散歩近い旅&山
梨文学散歩」
URL:http://fkoktts.hp.infoseek.co.jp



水木 亮
みずき りょう

1942年北朝鮮生まれ
劇作家 劇団「コメディ・オブ・イエスタデイ」主宰
1999 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞を受賞
戯曲集に「母の名は山崎けさのと申します」(テアトロ)「美しい朝の国」(カモミール社)。研究書「山梨の民俗芸能」(勉誠出版)
2003 四日市市民ミュージカル脚本大賞受賞 「風花随筆文学賞」「近江母の郷文学賞」受賞
2004 演劇雑誌「テアトロ」に1年間エッセイを連載

描かれている。苦しい生活の情景が目には浮かぶ力作である。特に怪我をしたひな鳥を助け、それがよく少女に懐き、少女も可愛がっていた「ヌヌ」が、結局食べるために父親に殺され、首を切られながら宙を飛んだ姿は、作者にとつて一生忘れられない光景だったであろう。そのヌヌの姿は、このエッセイが万人の目に触れることで、人々の心に残り、今再び蘇る。そしてけなげなヌヌの供養にもなったと思う。

いう良識的な物言いは常に在った。けれども、人々を動かすことはなかったのである。それどころか、「良識」が時代の空気の変化を見失わせてしまうことはなかったか。

政治、経済、外交の分野では、我々は「国民感情」とか「国益」という名のマスとして捉えられている。個々のひとの暮らしや想いは統計やパーセントに集約されていると見なされる。ここで教育、軍隊、憲法、戦争責任、天皇制……を持ち出してもインパクトは薄い。

応募作を読ませてもらう中で、ひとびとの暮らしや人生に胚胎した想いの尊さを再発見した。いずれも小さな情況での哀惜であり、悔恨である。あるいは、怒り、喜び、平安である。けれども、ここにこそ時代を映し、日々の暮らしに翻弄されてきたひとびとが確かに存在する。ここではひとりひとりが家族や地域や時代を構成し、その影が刷り込まれている。印南房吉氏「十六歳の闘い」、たまきよし氏「サツマイモ」、本間美紗子氏「ヌヌ」はこうした意味で印象が深かった。我らの経験した戦争や戦後を「語り継ぐ」のも、おかしな流れに棹さすのも、個々人の暮らしや想いに立脚してもらわねば意味がない。

入選、選外とりまぜてここに残った作品を挙げる。平山浩己氏「森の人」、原武彦氏「妻の夢」は長い人生遍歴を濾過した末の安らぎの中に、都市というものに対して引いた一線をくつきり感じ取れる。岩井智重氏「不思議な数か、そのほうが読み手に伝わりやすいと私は思う。以下心に残った作品について触れたい。

「風の機微」は風をめぐる一見平凡な題の内容を、興味深く読ませるといえるのはかなりの力量がないと難しい。その点、この作者は自然への観察が鋭く、それを人事に絡めていく手法がうまく、なかなか力のある人だと思った。「サツマイモ」は引き揚げ者の作者が、サツマイモを買いに出かけて受けた村人の親切を描いている。村人の人情の機微に、作者の忘れられない思いが伝わる作品である。さらに環境問題にふれて、エッセイの内容を濃いものにして

いる。他に「増穂の小貝」「出版物の陰で」「姉」(同名が二作品あったが共に)いずれも捨てがたい味があった。

私が注目したのは「化粧品裏事情」である。女性を美

4」や内海航氏「風の機微」は着眼点が面白いし、来島徹氏「姉」も胸を打つものがあった。ただ、「作る」ことは構わないし、必要な作業だが、それは誰もが共感できる普遍化作業であってほしいと感じる。印刷会社の文選場を描き、短編小説にでもなりそうな田中勤一郎氏「出版物の陰で」は懐かしかったし、若い女性に改めて性的魅力を感じる堀田光美氏「恥ずかしい七十歳」あるいは柳徳子氏「松葉杖」はユーモラスだが、我が身の内外の老いを顧みて身につまされた。

伝わる思い

水木 亮

今回の審査で感じたことは、特に熟年の方々が本格的に自分の思いを表現することに挑戦していることであり、貴重な体験が語られていることである。エッセイはこういう書き方がベストであるという法則はない。ゆえにいろいろな書き方や内容がある。

観念的な内容のエッセイもあるが、そういう作品はなかなか人のこころを揺さぶるには難しい。やはり身辺の出来事の体験を深く見詰め、感動をもとにいかにか表現していくしく変える化粧品が、実は多くの動物実験により、その犠牲のうえに製品化されているという。ある出版社の社長が、「誰も見たことのない色があれば誰でもその色を見たくのである若い女性が、そういう所に着目している視点がいいと思った。

さらに、「自分の出来ることは、そういうおびただしい動物実験をしている会社の製品を買わないことである」としている。ここにはただ文章に表現しただけでなく、一歩前に出ていくアクションがある。日常生活からの発見とそれから引き起こされる行動。このところがこのエッセイの魅力であると思う。

最優秀の「ヌヌ」は、審査員が満場一致で推薦した。北海道の開拓の村に生きる人々の暮らしが、少女の目を通して

心の根の花々

五十嵐 勉

第一回のエッセイ・コンテストということで、日本各地からどんな作品が集まってくるか、どんな生活やどんな思いが届けられるかと胸を膨らませていたが、寄せられたたくさんさんのエッセイ作品は期待どおりのものだった。どれもおもしろい、それぞれに強く思いのこめられた内容が、どれを選ぶかに苦しまなければならなかった。日本各地に息づいている心の根の模様をよく見せてもらった気がして、ひじょうにうれしかった。

コンテストの選考の苦しさは、それぞれの筆者にとってかけがえのない体験や思いに優劣をつけなければならぬところにある。それぞれの人にとって一度きりの人生である以上、本来体験や人生への思いは等しい価値を有している。それぞれ別個に絶対的な価値を持つていないはずである。それに文芸の形としてあえて点数をつけ、読者の側からの価値の棒をあてはめなければならぬところに、選考にたずさわる者の苦しみがある。三次選考を通過した作品はどれも「文芸思潮」誌上



五十嵐 勉

いがらし つとむ

作家・「文芸思潮」編集長

1949年山梨県生れ

早稲田大学文学部文芸科卒

79「流論の島」で群像新人長編小説賞受賞

84より約7年タイに滞在しカンボジア問題を中心に広く東南アジアを取材

98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞

2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
著書『流論の島』（講談社）『緑の手紙』（アジア文化社）『鉄の光』（健友館）

に載せてたくさんの方に読んでいただきたい内容を備えているし、二次選考を通った方の作品の中にも「こんな人生への思いがあるのか」と感心する作品も少なくなかった。選考の矛盾は、できるだけ誌上に載せさせていたかどうかという点で乗り越えるしかない。雑誌の役割は、一人でも多くの人に読んでもらうことによって、その作品に込められた思いを共有することにある。そこに文芸の豊かさがあり、文芸そのものの目的の一つもある。

たくさんさんの優れた作品が集まったなかで、どうしてもトップを選ばなければならぬことになったとき、強く推したい気持ちにさせられたのは、本間美紗子氏の「ヌヌ」と印南房吉氏の「十六歳の闘い」だった。

「ヌヌ」という変わったタイトルは読み進めていくうちに

むしろ強い感情となって焼き付けられてくる。北海道の開拓時代の苦闘が、一羽の足の骨を折ったヒヨコと少女の生き物の熱い交流のうちに切実に響いてくる。生きる息づかいが熱く届いてくる、感動の深い作品である。

印南房吉氏の「十六歳の闘い」も、これに劣らない感銘を与えてくれる作品である。東京の空襲を、戦史で見る写真や記述とは別に、一人の人間の生きざいでいく過程として触感させてくれる。

中島飛行機工場に地下室があったこともこの作品で初めて知った。靴がないことを裸足に墨で塗って軍人に抵抗する少年の意志もすがすがしい。また焼け死んだ友人の遺志を継いで、新たな製品を産み出していく人生の方向も筋の通った強さと明るさを見せている。

友人を失った戦争体験が自分の足を失ったことを乗り越える大きな力になっていることに、一貫した人生の真の勝利を感じさせる。全人生をかけてくる迫力はこれが一番だった。この意味で当選作になるべき作品だったが、私の推し方が足りなかった。悔いを残した。優秀作「ポップ・ステップ・ジャン



選考会風景

プ」は、カンボジアの女性といっしょになる息子を見守る母親の話である。国際化が進んだ昨今、アジアの女性との結婚を前向きに温かく受け止める姿勢は、タイに七年近く住んだ私としては今後の日本人のあり方として評価したかった。誌面がないので、これ以外の優秀作については他の選考委員に譲りたいが、奨励賞その他で印象に残るのは、

「流水ウォーク」（榎原歳譜）、「雪の思い出」（山本千代）、「藤枝垂れ」（榎並掬水）、「夕立のレクイエム」（高橋惟文）、「震災」（松下弘美）、「私と足のはなし」（峰谷マチ子）、「夢を折る家」（岩田明子）、「我が痛戦争」（佐藤朗子）などだった。

「帰郷／切手のない手紙」（正岡秋子）は文章に可能性を感じさせたし、「流水ウォーク」は入賞しておかしくなかった。集まったたくさんの方のよい作品を逐次「文芸思潮」誌上に掲載して、多くの方に読んでいただきたい。

又 又

本間美紗子

私が四歳の冬は、父が入植時に造った掘った建て小屋に、九人の家族がひしめき合っていた。兄弟は身体がくっついてただけで喧嘩になった。居間にあるたった一つの窓からは吹雪の様子や、太陽の様子、星や月の様子が窺えた。ラジオもない、電灯もないランプ一つの生活であった。大きく切られた炉に薪がくべられ赤々と燃えていた。

蓄えられた馬鈴薯を食い、蕎麦団子を食事として、配給の米に麦を混ぜ、芋を混ぜ日々が過ぎていった。

兄や姉は学校へ行き、私と二歳の弟だけが、父母と取り残されていた。

堪え難い冬から解放される春は、我先に母の長靴を弟と奪い合い、泣く弟を尻目に、狭い家の中から飛び出していた。

冬に買われてきた明け四歳の馬は、父のたずな捌きでプラオを重そうに引き、土を反転させていく。去年肥料も撒かず蕎麦を蒔いた土地は、早々に耕され豆が植え付けられた。

まだ開墾されていない土地に生えている樹は、スコップでひと掘りずつ掘り返され、ほとんどの根が見えたら、馬で何度も何度も引かせる。馬は最後の力を絞るように嘶いた。根がむくむくと生き物のように空に向かって立ち上がり、大きな穴を残して引きずられていった。父と兄の開墾は気長に繰り返され、徐々に土地は広がっていった。

レグホン十羽が増えた。

雛だった鶏は秋に小さな新子の卵を産んだ。無収入の家族を支えるのにてつとり早い収入源となり、貧しい家族に、

小さな卵は貴重な財源であった。

再び冬がやってきた。

冬は一つしかない窓を覆うように、来る日も来る日も空風が雪を運びながら吹き荒れた。

外に出られない私は、囲炉裏端で白を掘る父の背を見ていた。父は正月に旨い餅を食わずと笑った。父の作った白と杵で少しの米の餅と、いなキビ餅は作られた。卵も膳を賑わした。鶏の肉も膳に載った。

こうして入植後の生活は三年目の春が来た。農作業の合間に掘り起こされた土地が、ようやく植え付けが可能になって、蕎麦や豆が植えられた。冬の間明け四歳の馬一頭が増やされていたので、二頭引きになり、畑は順調に耕された。

レグホンは毎日卵を産んだ。何処かから、背負い籠の卵買いの老人が回ってくるようになった。定期的に来る老人は優しい人で、遠くの畑の父と一緒に捜してくれた。そのうち両親の留守の時でも、五、六個でも卵を集めておくと、代金を置いていった。先に住んでいた人が植えたスモモやグスベリの実がたわわに実った。卵買いの老人はスモモやグスベリを私たちと食べ、身体を休めてからゆつくり坂を下っていった。めったに人に会うことのない野中の一軒家には、貴重な出会いだった。

ある朝、父の怒声が聞こえてきた。庭先に出てみると父

は洗面器に水を張り、一羽の雌鶏を無理やり洗面器ごとリング箱をかぶせた。中では鶏がバタバタ羽を動かす隙間から羽根が抜け落ちて飛び出してくる。雛をかえそうとする雌鳥の抱卵が始まったのだ。

父は笑いながら誰とはなしに言った。

「抱きにつきやがった。卵を産まなくなる」

順調に売っていた卵収入がなくなるからだ。他の鶏は大変だというようにけたたましく鳴き、雄鳥はコウコウコウと威嚇するように周りを足たかだかに歩き回っていた。

私は可哀相な事をする父が怖い人に見えた。そして、何日かすると、リング箱から出される。鶏は毛が抜け禿げた胸を突き出し何もなかったように、コウコウと鳴きながら庭に餌を求めて歩いた。何羽目の鶏を交互にリング箱に伏せていた父が、一羽がいないと捜し始めた。私は棒を持ち父の真似をして鶏を捜した。「コウコウコウ」と呼ぶことも知らない。勿体ない、勿体ない」

父はぶつぶつぶ言っていたが、諦めたのか鶏捜しをやめて畑に出ていった。

家族が鶏のことを忘れた頃、コウコウと誇らしげな鳴き声をたてながら、行方不明の鶏が八羽の雛を連れて帰ってきた。ひよこを初めて見た私は、産毛がふわふわとして、

可愛らしく触れてみたくて堪らなかった。ひよこを黙って見ていると、父が巢を探しだした。父のすることに興味のあった私は後を追った。花畑の枝垂れた山吹の花の下に、菓を少し敷いた巢が見つかった。父は何も言わずに巢を壊してしまった。そして、板切れで巢箱を作り、夕方になると、親子を追い込み、鍵を掛けた。朝は野原に放し飼いにし、毎日同じように巢箱に追い込んでみると、親鳥はいつの間にか夕方になると、雛を連れて寝込むようになった。遊ぶものがない私は動くおもちゃを貰ったように、毎日ひよこを追っていた。

ある時、父の造った家の入り口のドアにひよこの足を挟んでしまった。ひよこは横になってピヨピヨ鳴いていた。父に強かに叱られた。怒りながら父がひよこの足に小枝の添え木を結わえた。父の手から餌を貰い、横になっているしかないひよこは親鳥から離されピヨピヨと鳴いていた。私も父の真似をして餌をやった。熱心に餌をやりたいといったら、父は私の役目にくれた。ひよこの足がようやく治った。その頃にはひよこは生きた玩具になっていた。

私が呼ぶと「ヌツヌ」と鳴き、羽を広げひよこは抱かれるのを待つようになった。ヌヌと鳴くのでヌヌという名を付けた。母の袖無しを着て、腰を紐で結んだ私は、袖無しの背をコッポリとあげヌヌを入れた。ヌヌは逃げもせず「ヌツヌ」と優しく鳴きながら背負われていた。他の者が

心配になった。

蛇のことを忘れた頃に、庭先で父は人相の悪そうな男と長いこと話していた。

遠巻きに様子を窺っていると、持ってきたタライに湯を張り、男がヌヌたちの首を落とした。首のない鶏が四、五メートル飛んだ。男は飛んだ鶏を捕まえ、毛を塗り始めた。

ヌヌたちの羽は男達の手や、足許に怨念のように絡み付いた。そして、男から離れた羽はふわふわと風に舞い、名残り惜しげに、別れを惜しんでいるように、飛び去らなかつた。

「ヌヌが死んじゃった。ヌヌが死んじゃった。父ちゃんの馬鹿。父ちゃんの馬鹿」

私は大声で泣いて父に飛び付いて胸を叩いた。父は黙って私のなすままだった。

家に入っても、狭い居間でいつまでも泣く私に、姉はもう卵を産まないから肉にしたと教えてくれた。私はヌヌだけは残しておいてほしかったので、いつまでも父を責め続けた。頑固な父は苦しげに横を向いたままだった。泣く泣く諦めた私は、残った新子の鶏から第二のヌヌを決めたが、私が呼んでもとっとと逃げてしまったり、私を啄いたりして、どうしても馴染まなかった。普通の鶏にすぎなかった。それから私は鶏とは遊ばなくなつた。風邪の時など好きで飲んだ生卵は飲めなくなつた。肉も大嫌いになつた。だ

呼んでも逃げるだけだったが、私が呼ぶとヌヌは羽を少し広げ私に抱かれた。ヌヌは姿の綺麗な鳥であった。私にはどれがヌヌなのか一目で分つた。父も母も鶏が人に懐くことが不思議だといった。ヌヌは傷つき親に捨てられたので、私を親のように思っていたのかもしれない。

一年が過ぎヌヌも毎日卵を産むようになった。ヌヌは卵を産むようになって、呼ぶと私を待った。抱くと「ヌツヌ」と鳴いて甘えるように小首をかしげた。

私は漸く一年生になり、兄は卒業して一人前に父の手伝いをしていた。兄の使い古しの横鞆を背負って学校に行つた。家に帰ると兄が卵を取ってこいと命令する。私は鶏小屋にとんで行き巢箱に手を入れると、手にひんやりと冷たい物に触れた。卵の感触ではない。私は夢中で逃げて帰ってきて、父に卵が取れないと異常を訴えた。そこで父が鶏の巢箱を庭に持ってきて中を見ると、青大将が卵を飲んでとぐろを巻いていた。手を入れて異変を感じていた兄は、私を騙したのだつた。父と兄は鳥小屋から庭先に巢箱を持ってきた。雌鳥たちはいつもと違う甲高い声でコウコウと鳴き、逃げ惑つた。雄鳥は尾を立て足を高く揚げ、雌鳥を守らんと敵意をむき出しに鳴いた。

父は長い棒で蛇を追い出した。巢箱から出された青大将は卵の入った腹を重そうに膨らませ、父に追われのつそりと山際の草の中に消えた。私はまた蛇が戻ってこないかと

んだん生活が楽になり、正月になると必ず鶏が潰される。

芋や人参大根と一緒に煮詰められるが、それさえ口に入らなくなつた。貧しい日々の贅沢な料理として卵は重宝されていたのに、俎の上で捌かれた鶏の卵巢の粒を見ると吐き気さえしてきた。

「いつまでも根に持って困つた奴だ」

いつもはすぐ短気に怒る父が、呆れたように呟いていた。私は成長とともに、毳つきや石蹴りなどの遊びに熱中して、ヌヌのことは忘れてしまった。私自身忘れていながら、身体の内が忘れていかなかった。成長するとともに肉嫌いがひどくなつた。



等身大の自分から 本間美紗子

一次通過の通知を受けてから、通知書を何度も出しては見えてきました。そこへ電話が鳴り、見覚えのない番号が表示され、ためらいがちに受話器を持ちました。

「あなたが全員一致で受賞されました」

なにがだろう。不審に思っていると、「ヌヌ」が一番でした。開墾の様子、動物の愛情もよかったですよ」「は、はい。そうですね」「私はまるで他人ごとのように、脳の働きが止まっているような感覚の中にいました。受話器を置いて、一番だと顔が綻びました。

出身地が樺太ということがあってネガティブな学校生活を送っていた私は、言葉より文字という方向に活路を見出していました。短歌と作文に夢になった十代の頃から、紙と鉛筆があれば満足で、時間を忘れ、嫌なことから逃れることができました。

平成になって朝谷歌三先生と知り合い、「風が吹いても雨が降っても、道端に転がっている石ころを見ても文章になる」「書くだけじゃ駄目だ、詩がなくては駄目だ。周りや風景が見えるように書け」と、生き方と書き方を学びました。始めは思うように筆は進みませんでした。立っている場所から等身大のメッセージを送ることで、話すことに苦手だった私に暖かい交流の場が与えられ、華甲を過ぎて、やっと細やかな長所となったのです。



ほんまみさこ

三年前に書いたものを手直して孫の名前で、エッセイの賞が受賞できて、父にも故郷にも感謝の気持ちで一杯です。

故郷では樺太の言葉は使うなど言われていますが、苦しいこと悲しいこと辛いこと、楽しいこと、自分を育ててくれた物を否定して、過去を否定して生きることが出来ないと思ひ、出身地とは聞かれたらはっきり答えられる歳にもなりました。そんな中で書いた「ヌヌ」が選ばれ、本当に嬉しいです。有り難うございます。



十六歳の闘い

一、焼けてサツパリ

ふるさと浅草は一望焼け野原だった。広々と煙の中、上の野の山から隅田川が目近くくねくねと鋭く光って見えた。

昭和二十年三月十日、東京大空襲で下町の十数万人が焼かれ、溺れて死んだ。

目にチリチリと沁み込む煙と鼻の奥まで刺す死臭の中、私は炎に消えた友人、丹野とその家族六人の姿を探して一週間、浅草はもとより本所・深川から向島までたった一足だけ残った重い革の編上靴を履き、カーキ色の脚絆を巻いて、汗が沁み通った戦闘帽そして小さな茶色の布靴を肩から斜めに掛けて歩き回った。時に十六歳、中学（旧制）を四年で卒業、K工大に入学が決まったばかりだった。靴の中には筆記具、書類、貯金通帳と印鑑に木綿のパンツ三枚

印南房吉

が入っている——これが全財産だった。焼け出された人達が寄り添うように集まっていた小学校や区役所の壁だけになった焼け跡を次々にたずねた。

地から空へもうもうと白煙、黒煙が限りなく立ち昇り、焼け跡には生き残った人達が焼け炭で書いて立てた消息札が一日毎に増えてきた。

「タケオ、フジ小にいるよ……」健二。母ブジ根岸に行く

空に太陽は無かった。

隅田川に膨れ上がった死体が次々に浮いて流れていると教えられ、もしやと川沿いを辿って探した。兵隊さん達が引き揚げて公園にズラリと並べた屍体の胸の滲んだ名札を一人ずつ確かめた。女と子供ばかりだった。死臭が風に渦

を巻いていた。一隅に、懐から集めた位牌が山になっていた。探し疲れて座り込んだ地べたの目の前にゴロリと焼けボツ杭がころがっていた。よく見たら歯があった。白かった。焼け尽くした屍体だった。この時、丹野を諦めた。人間は土に還るんだ。丹野も故里の土に戻ったんだと悟った。とめどなく流れる水道の漏れ水を呑み、避難所で見知らぬ人に分けて貰った乾パンを齧り、時に運が良ければ炊き出しの薄いが熱い雑炊を嚙り込んだ。熱さが身体中に沁み通った。うまかった。泪が滲むほどうまかった。ふるさとの人情の味だった。誰しもが胸の底に死者を抱き、だからこそ生き残った者同士で励まし合い、慰め合った。死線を越えて生き残れたのは偶然、ほとんどの人達が手足、顔に無残な熱傷を負いながら口々に「ゼーンブ焼けちまってサッパリしたよなあ」と共感し合っていた。お互いに残ったのは生命だけと体感したのである。日が経つにつれて焼け跡にボツン、ボツンと焼けトタンで囲った小屋が増えて来た。ふるさととはやっぱり生きる場所である。

二、それから

K工大の入試に合格したと言っても、中学の時の勤労働員先だった横浜・富岡の大日本兵器の寮から、大学の動員先である立川の中島飛行機の宿舎に移っただけの話である。K工大も焼けてしまつてとりあえず中島の宿舎が学校代

槍を持って右やら左に向いて行進し、時々エイヤーツと掛け声をあげて突き出した。やたらに腹が減り、雑草刈りよりも空しい時間だった。

或る日、靴が破れて履けなくなった仲間が出たので、一同相談して全員裸足で並んだ。文字どおり烈火の如く怒った士官は一人の胸倉を掴んで「裸足で戦えるか!」と怒鳴ると叫んだ。焼き殺された十数万人の代弁だった。一同口々に叫んだ。怒り捲いた士官は教練を打ち切り、学長に怒鳴り込んだ。我々は黙って雑草刈りを始めた。軍事教練よりやり甲斐があった。

「こういう非国民(何と懐かしい言葉だろう)に教練は無駄だ!」

学長は平然と、「靴がないのは学生のせいではない。全員裸足になったのは褒めていい事だ。学生に必要なのは明日のための勉強です。教練はその一環です」——そう、勉強するための入学であった。

一週間後の教練時、一同相談して裸足に墨を塗って並んだ。全員ピンタを覚悟だったが、教官は黙って空を見ていた。突然「小官の任務は本日をもって終了した。小官は原隊に戻る。短期間だったが諸君は全力を尽くしてくれた。諸君の健闘を祈る。別れ」と去って行った。背中が泣いて

わりであった。何はともあれ三食と寝る所があるのが嬉しかった。入校は四月、それまでの間の寝食が問題だった。友人、知人を辿って二、三日ずつ泊まり歩いた。それから、どうする? どうなる? で頭が一杯、無性に腹が減った。これがドン底かと自嘲、必死の毎日だった。後年、片脚を失って更なるドン底を這おうとは知る由もなかった。一カ月後、中島飛行機の宿舎に入れてホツとした。三食と畳があり、同じ様な境遇の仲間と一緒に嬉しかった。三食と言ってもほとんどが代用食、マレに出て来る米は、大量の芋、大根との雑炊だった。でもいい、焼け跡を彷徨っていた時より遙かに落ち着けた。時々要領のいい仲間が何処からか食券を手に入れてきて一同、二回ずつ並んで食べた。皆な幸せ一杯の顔だった。

中島飛行機はB29の格好の目標になっていたらしく、地上には一本の立木もなく、コンクリ塊の荒野だった。いまだに空襲の行き帰りに二、三発ずつ一トン爆弾が降って来た。だから耳を劈く警報の度に頑丈な地下壕に逃げ込んだ。地中深い工場の一角で細々と飛行機エンジンの整備をしていたが、我々に出来る仕事はなく、地上の雑草刈りを空しく続けていた。授業は黒板だけで出来る数学が主体で難解だったが、我々の生き甲斐になっていて懸命だった。週に一度、軍事教練が行われ、その時間になると雑草の空地にぞろぞろと横に並び、一人威勢のいい配属将校の大声に竹

いた。

大本営発表と軍艦マーチがどんなに威勢よくても空襲の都度迎撃する戦闘機の機影は光らず、対空砲火も疎らになつてきた。日本が追い詰められているのをひしひしと肌にした。退却を転進、空襲を敵機撃退、降伏を玉碎と言葉だけ言い換えているのが虚しかった。

広島次いで長崎と新型爆弾の大文字が新聞に並んだ頃、突然三日間の休暇が出た。休暇というより休学命令のようなものである。さて困った。宿舎に居ても飯が出ないという宣告である。兄の戦友の実家が調布で製粉業をやっているのを訪ねた。幸い快く泊めてくれた。何年ぶりかで白い御飯を食べた。その白さ、輝き、幸福感がじわーっと溢れてきた。御飯はホントに美味しいものである。いくら食べてもまだ入った。

翌八月十五日、ラジオで天皇陛下の放送があると言う。一緒に聞いた。ザーツ、ザーツと雑音の中で聞き取れたのは「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……」の甲高い一節だけだった。一同と「こりゃあ、いよいよ本土決戦かあ、戦車がワンサと来るつてーぞ」ともつともらしく合槌を打っていた時、アナウンサーのくどくどしい解説が始まった。漠然と抽象的な言葉が並んだ中に、たった一言「ボツダム宣言を受諾する」とハッキリ聞き取れた。反射的に《ボツマス条約》が頭に浮かんだ。「ありゃあ、日本が負

「スッゴイナーノ……」学校じゃあ教えてくれないよ……さらに熟読、

兄は原稿を一読して

「サスガ、体験者！」と妙な誉め方をした。

死と向き合った時、人間は必死に狼狽し、もがいて、生き抜くものである。十六歳の体験智である。私の孫の一人、十五歳の男

十五歳の孫に読んでもらって

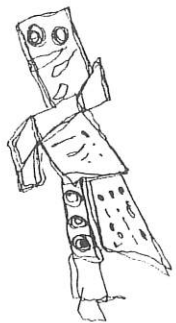
印南房吉

優秀賞 受賞の言葉

十年程前、サンフランシスコの高層ホテルの三十階で火災に遭った。家族旅行も終りに近く荷物も随分増えていた。深夜、消防車のサイレンが微かに聞こえ窓を透かして遙か下に点滅灯がズラリと並んでいた。廊下のドアを開けると瞬間にあの懐かしい臭いがツーンと鼻を刺した。空襲の記憶がバツと甦った。あのとき以来、就寝前には靴・衣類・荷物を整頓する習慣が身についている。全員を起し荷物を持ってロビーに向かう途中消防士の一人がエスコートしてくれた。この時家族一同火災を実感した。ロビーでは私達がトップだった。フロントの人がコーヒを持って来て私をナンパワンと誉めてくれた。私の空襲体験が思わぬ所で役立った。子供達は最初膨れっ面をしていたが、やがて

『何が起きても、そこが新しい出発点』がいいとマークした。今回の受賞を一番喜んでくれるのはこの孫だろうと楽しみにしている。

人生、時にはいい事があると感謝している。



いんなみ ふさきち

1929年（昭和4年）東京浅草生れ
76歳
22歳の時、事故で左足を切断
荏原製作所において三十数年間、
各種機械装置の開発に従事
1989（平成元年）ライフ・ケア機
器研究所を設立
現在、福祉機器・用具の開発を行
なっている

けたんだ。戦争は終わったんだ……きつと」身体がガクンとした。

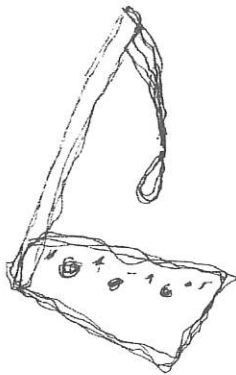
炎天の一本道、もうもうと砂塵を曳いて草色のバスが来た。

敗戦……どうする？ まず中島飛行機の宿舍に戻った。仲間達も次々に集まって来た。数学と英語の教授も早々に戻って来ていた。英語の教授の口から明確にポツダム宣言受諾即降伏の解説を受けた。急に頭の中がスッキリ晴れた。もう空襲はないんだ……それだけでもいいじゃないか……；口々に喋り始めた。重しが取れたのだ。夜、電球に塗った墨を洗い落とした。二十ワットの電球がこんなにも明るいとは——顔を見合わせた。開け放った窓から灯りが見えた。四方に鋭い光芒を放った。見る見るうちに灯りが増えてきた。窓も明るい。人影が踊っているように映った。もういいんだ。もう空襲はないんだ。戦争は終わったんだ。灯りは安堵の象徴であった。

三、今

当然のことながら人生は常に紆余曲折の道である。事故で片脚を失い、義足を引いて五十年、這い回るように生きて来た。いや、生きて来られたのは自分の十六歳の体験から得た「何が起きても、そこが新しい出発点」と言う認識だった。

私は今、福祉機器・用具の開発だけを細々と続けている。福祉の有難さ、必要性を身を以って知ったからである。残念乍らもうハイテク・新素材をこなすだけの力はない。が、ローテクの用具ならばまだ創れる。曰く「義足で露天風呂」・「階段用伸縮杖」・「使い捨てオマル」等々、題材は色々あり、考える時間も楽しみもある。亡くなった丹野の夢は造船技師、私は飛行機の技師、二人で「空飛ぶ潜水艦」のスケッチを作った事がある。明日にでも飛ばせそうな気がして楽しかった。いまだに丹野の墓はない。しかし十六歳の私の胸に刻み込んだ二人の夢は今も生きている。「空飛ぶ潜水艦」が「福祉用具」に変わったって、丹野は領いて一緒にやってくれるに違いない。我々の十六歳の青春であり、闘いである。



風の機微

内海航

先週まで居座っていた鈍色の雲がどこかに消え、空にブルーが戻ってきた。それとともに、これまで主役だった紫陽花に代わって向日葵が陽の光を浴びて黄金色に輝いている。

久しぶりに、日差しに誘われて街を散歩してみた。木陰に入ると涼しい風に心が休まるが、照り返しのまぶしいアスファルトの路上に佇むと生暖かい風がじつとりと体に貼りついてくる。日陰はゆっくり、日向は急いで、と歩くスピードが無意識に変わる。日陰と日向とは肌をなげる風の感触が明らかに違う。同じように街を吹き抜ける一様の風なのに何故違うのか、と改まって考えてみると、わかっているようでわからぬ自然の神秘に躓いてしまう。

同じ風といえどもその差異をはっきり認識させられたのは、十五年くらい前のことだが、冬の武庫川の河川敷を走

ったときである。河川敷は風洞のように風の通り道となっている。往路は厳しい六甲おろしの風をまともに受けるので体が凍えて思うように走れないが、折り返して復路になると、追い風がやわらかく背中を押してくれる。すると、春のような温もりが感じられる。順風と逆風とはあまりにも対照的である。

さらに、季節の推移、一日の中では時間帯、天候などのそれぞれの条件によっても風の趣は微妙に変わる。そんな掴みどころのない風が路地を駆けめぐり、石垣にぶつかり、樹木を揺るがし、家の中に吹き込んでくると、日々の暮らしにさまざまな波紋を投げかけてくることもある。そんな思いがしたのは、一九九四年から七年半にわたる東京での単身赴任の生活だった。必ずしも風だけのせいというわけではないが、独りで風を受ける形になるので、その影響

にきついものがあつたことは確かである。

「新しい合弁会社を設立するので、転動してくれないか」と、上司から言われたが、私はなかなか決断できず答えを先送りしていた。その二十年前に東京から大阪に転動してきたのもう大きな異動はないと安心していった私にとつて、上司の話は晴天の霹靂だった。しかも料理や洗濯などの身の回りのことはすべて妻に任せっきりだったので、はたして自分だけで暮らしていけるかという一抹の不安がつきまとつた。とはいえ何度も上司に促されると、ついに清水の舞台から飛び降りるような気持ちで首を縦にしていた。

東京は麻布十番の近くに住んだ。北陸に一人で住む祖母の面倒をみるために私の母が空けていた家に住みつくことにした。あたりは都心ではめずらしく樹木が多く、自然の豊かさが十分とは言えないが、まだある程度残っていた。とはいえ、住んだ家は一階ががらんとした駐車場で、その階上に六畳と三畳の二間しかなく、いかにも安普請の感じがぬぐいきれない。夏になると暑さが部屋にこもり、冬には隙間風が忍びこみ、地震の揺れには敏感に反応し、自然の厳しさ・恐ろしさを倍加させるような竹まいだった。

家族と離れて生活してみると、まるで深い谷底に突き落とされたかのような衝撃にしばらく沈んでしまった。一人で壁と向き合つて黙々と食事するわびしさ、自分しかない生活空間のさびしさ——孤独感に苛まれて寂莫たる思い

で日々を過ごしていた。それが半月、一ヶ月たつと、自然と孤独な生活のリズムになじんでくる。料理だつてやってみればなんとかなるし、洗濯や掃除だつてそんなに苦痛と思えなくなる。単身生活に耐える自信みたいなものが次第にわいてきた。だが、そんな独り暮らしの中で悩まされたのは、路地を吹き抜ける風のいたずらだった。

階下の駐車場は道路側をのぞいて三方が石塀で囲まれているので、風の吹きだまりとなつてしまう。その狭い道路の向こう側は高台となつており、そこに大きな寺があつた。寺の境内にはさまざまな樹木が植えられていたが、その中でも道路にかぶさるように枝をいっぱいに広げている桜の雄姿がまことに印象的だった。一方、家の裏側からは同じく大きな桜の木がわが家の屋根を覆わんばかりに枝を張りめぐらしていた。春になると家の前から後ろからも桜が一斉に花を開き、家の中は淡紅色に彩られて浮かれた気分になる。そんな桜のトンネルに、道を通る人々も楽しんでいった。また、花びらのひらひら舞う姿はなんともいえぬ風情があつた。ところが、花の見ごろを過ぎると花びらや萼は道路に落ち、やがて風に乗つてわが家の駐車場に舞い込んできた。美しいはずの桜の情景が、突如、厄介なゴミに変わり、駐車場を掃除しなければならぬ私にとつて悩みの種となつた。

家の裏側から舞い落ちる花びらや萼もまた曲者である。

落ちて、屋根の樋を詰まらせたからだ。雨が降ると樋からあふれ出た雨水は駐車場の塩ビの屋根にぶつかり、まるでバケツの水をこぼしたかのように激しい音で私の睡眠をさまたげた。塩ビの屋根に梯をかければ樋の掃除はできないこともないが、屋根には勾配があるので梯が滑り落ちる危険性があった。そんなことから樋は詰まったらままで、雨の降る夜がなんと疎ましかったことか。

さらに、「風が吹けば桶屋が儲かる」という諺のように、風からめぐりめぐっての因果な思いをしたこともある。単身赴任したばかりの最初の冬は都心でも雪が降り、北風が吹きすさぶ寒い冬だった。そのせいか、近所の高台にある公園に捨てられた猫の一部が坂を下り、わが家の駐車場をねぐらにするものが二、三匹現れた。石塀で風が遮られるし、車の底にもぐりこめば寒さを和らげることができたのだろう。野良猫の抜け毛が地面に落ちた桜の花びらや萼にからみあって駐車場に散乱していた。

ある夏の朝起きると、足の脛が赤くはれ上がって痒くて仕方がない。畳の上をよく観察すると、指でつまむのも難しそうな小さな生物がびよんびよん跳ねているではないか。悪戦苦闘のすえ数匹捕まえて紙につつんで病院に持ってきた。老医師は顕微鏡をのぞいてからにやりと笑った。

「君の足の犯人は、これ、これ、猫ノミじゃよ」

老医師の勧めで顕微鏡をのぞくと、体を「く」の字に長

前なら瞬間湯沸し器のように反応するところだが、そのときの私は妻の棘のある言葉にまったく動じなかった。風のもつ機微にふれ、そして風の影響にもまれながら過ごしてきた七年半の歲月は決して無駄でなかったような気がする。

優秀賞 受賞の言葉

単身赴任の生活

内海 航

受賞の知らせをいただき、しばらく信じられずにぼかんとしていた、というのが私の偽らざる感想です。というのは、エッセイを書くことの難しさや奥の深さが最近少しづつわかってきただけに、現在の自分の実力で、まさかこのように評価されるとは思っていませんでした。

今回の「風の機微」で取り上げた東京での単身赴任は、今から十年ほど前の話です。職場生活の終着点にあるゴールがすすかに見え始め、定年後の生活のことをぼつぼつ気にしなければと思っていた矢先でした。そんなことを独り静かに考えるには、単身赴任はとてよ環境でした。私の頭の中では、これまでのキャリアを生かすために翻訳の仕事をしたという漠然とした希望がありました。そのため、通信教育を受講したり、翻訳の認定試験を受験したりとわずかながら準備を進めていました。

それが、いつ、どこで、どういう風の吹き回しだったかわかりませんが、他人の文章を翻訳するよりも、直接自分で文章を作っ

い足をだらしなく曲げた微生物の姿が目にとまった。ノミは半世紀ほど前に見たことがあるが、それ以降は出くわしたことがない。すでに化石になったと思われる生物がまだ文明社会に生息していたことに私は驚いた。猫ノミの原因をあれこれ考えてみたが、階下の駐車場をねぐらにしていた野良猫の置き土産としか思い当たる節はなかった。

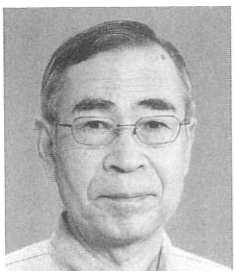
風が引き起こす路地裏のさまざまな出来事に戸惑い、悩み、我慢しながら七回の春秋を過ごしたことになる。そんな暮らしに別れを告げようとするころ、町に変化の兆しが見られた。大江戸線や南北線の地下鉄の駅が近くにでき、六本木ヒルズなどの超高層ビルが前に後に、よきによきと姿を現すと、おそらく路地を吹きぬける風の流れだけでなく、町の風情も変わるだろう。未練なくきつぱり去るのにはちようどよいめぐり合わせとなった。

長い東京での単身赴任を終えてから関西の家に戻ってみると、私はマラソンコースを折り返し、やがて順風に向かって走り出す気分になっていた。そんな気分が酒が入ると、「これからはご飯の仕度や洗濯がなくなるから……」

と、私はうっかり妻の前で口を滑らしていた。「あなたの東京での仕事が私にまわってきただけよ」と、妻の本音が返ってきた。

妻の言葉を邪推してみれば、単身赴任は私にとって逆風だったが、彼女にとって順風だったということだろう。以

そんな感慨にひたりながら、公園のベンチに腰をおろした。視線の先にある木々の茂みから、梅雨明けを知らせるかのように、蟬の声が風に乘って流れてきた。風は、確実に時の推移を伝えてくれる。



うつみ こう

本名 中村泰山
1941年(昭和16年) 東京 生れ
明治大学法学部卒業
2001 千葉スペシャリティケミカル社退職

てみたいという気持ちに変わっていました。もちろん、翻訳にしてもとて奥の深い独創的な仕事にちがいはありませんが、それよりも基本的にはまず与えられた原稿があつて、それに忠実でなければなりません。同じ文章を書くなら、鉄道のように予め設置されたレールの上を走るより、ヨットや飛行船のように軌道のない海や空を風に吹かれるままに自由に動き回りたい、と思いはじめました。

定年後、近くの文化センターの「文章教室」に月二回ほど通い、与えられたテーマを書く練習を三年間ほど続けてきました。今回の受賞はそんなささやかな努力が報われたようでもあり、さらに今後の心の糧にしてゆきたいと考えております。ありがとうございます。

サツマイモ

たまきよし

すこし高い所から眺めると、丘陵の大地は大きく波をうっているようにみえた。高低のコントラストがはっきりして、とてもきれいだ。その丘陵地帯は見はるかすサツマイモ畑で、掘り起こしたイモが地面に無数にころがっていた。

「さあ、そろそろ帰りましょうか。こんなにたくさんのおいもさんをいただいて、本当にありがたいわ」

そう言いながら母はサツマイモでいっぱいのリュックサックを担いだ。

「急がなきゃ、もうすぐ帰りのトラックが来る頃よ」

国道へ急ぎながら、畑でサツマイモの収穫をしている人たちに会おうと、母はいちいちいねいねにお礼を言いつて頭を下げていた。私も母にならって、

「ありがとうございます」

を繰り返した。

その時、畑からいきなり、声をかけられた。

「ちよつとまって、ぼうや、これ持って行きなさい」

その女の人は、大きなサツマイモを両手に抱えながら近づいてきて、私の背中の小さなリュックサックにそのサツマイモをドン！と入れてくれた。うしろによるめくほどの大きく重いサツマイモだったが、私は何かジーンときて涙ぐんだことを覚えている。

昭和二十一年、私が六歳のとき、鏡乃原台地のサツマイモ畑での懐かしい記憶である。

私の家族は終戦の年の秋、着の身着のまままで逃げるように京城から引き揚げて来た。縁あって飛驒の山あいの町に落ち着いたが、八人の大家族が一気に奈落の底に落ちたようだったと両親は当時を振り返ってしばしば語っていた。

それから、二十年が過ぎ、私は中学校の教師になった。あのときの飢えの苦勞も、鏡乃原のサツマイモ畑で出会った人々の親切も、トラックに乗せてくれた社長さんの好意も、悲しいかな私の記憶の端に追いやられていた。

昭和四十三年、飛驒地方の学校に勤務していた私が、いきなり鏡乃原のN中学校への転勤を命じられた。鏡乃原一帯は周辺の町村を合併して鏡乃原市になっていた。

ある秋の日、生徒を連れて写生に出かけた。私も一緒に写生をするために、絵になる風景を探しながら、学校の北にある高台に登った。私はそこに広がる風景に啞然とした。あのときの風景がそこに広がっていた。サツマイモ畑は半減し、あちこちに家が点在していて、当時のような見渡す限りのサツマイモ畑という風景ではなかったが、大きく波打つ丘陵の大地はあのときの記憶を一気に引き戻した。さらに、はるか北方の山の麓には竹藪が東西に走っていて、その竹藪の上に農家の集落の屋根が重なるように見えた。

たしかあのときも、収穫したサツマイモを積んで竹藪の方向に帰るリヤカーの後ろ姿を見ていた。

二十年前のあの風景はここに間違いなかった。

私は、竹藪の中のある集落を訪ねた。『あのときサツマイモ畑で出会った人々のほとんどはもう五十歳を越えているはずだから』と思いながら、それなりの年齢とおぼしき人をさがしていると、小川で農具を洗っている老人に出会

特に、あした食べるものが何もないという毎日は母にとって大変な苦しみであったと思う。そんなとき、ここから百キロほど南に鏡乃原という所があって、そこでは、お菓子の原料にしたり、デンプンを精製するためのサツマイモをかなり大々的に栽培しているらしい、だから、収穫の時期にそこへ行くと、もしかしたら、分けてくれるかもしれない、という情報が入った。母は早速、鏡乃原までいく交通手段をさがした。国鉄を利用すれば簡単だがそんな運賃を捻出する余裕はどこにもなかったからである。母の話を伝え聞いた近くの森林業者の社長さんが、「材木をトラックに積んで毎週一回、名古屋の市場まで運搬するとき鏡乃原を通るので乗せて行ってもいいですよ」と声をかけてくれた。さらに、

「材木を市場におろして、帰りに鏡乃原を通るまで四時間程ありますから、その間にゆっくり用事を済ませてください」といつてくれた。

母は、まだ学校に行っていない末子の私を連れて、鏡乃原に向けてトラックに乗った。帰りのトラックの荷台には、いつも、いっぱいのサツマイモが詰まった大小二つのリュックサックが置かれていた。

やがて、父も職を得て、母も和裁の内職が軌道に乗り、徐々に生活にも余裕が出来始めたことから、結局、鏡乃原へのサツマイモ行脚は、その年の秋を限りに終わった。

つた。私は突然話しかける非礼を詫びてから、二十年前の出来事やN中学校の北の高台から見たこの辺りがその時の場所に酷似していることを話した。

老人は洗いかけの農具をそこに置き、石に腰を下ろしながらタバコに火をつけた。

「懐かしい話ですなあ。」

「ええ、私も懐かしくて、いてもたってもいられなくて当時の感謝の気持ちを誰かにお話ししたくて、このあたりをうろろろしていたのです」

「あなたの言われる二十年前の場所がこの辺りかどうかは分からんけど、当時、そういうことはちつともめずらしいことではなかったですよ。引き揚げてきた人や食べるものに困った人たちがたくさんサツマイモの畑に来て見えたなあ。困ったときはお互いさまやで、みんなにイモを持って行ってもらったんです」

私は、小さなリユックサックに大きなサツマイモを入れててくれた女性の話をすると、

「そうか、そうか、そりや良かったなあ」と笑っていた。

「あのととき比べると、サツマイモ畑も少なくなつたように思いますが」

「うん、あの頃、この辺は全部イモやつた。戦時中は食料にしたし、終戦後には、いもカリント菓子を作る工場に卸したり、デンブン工場に卸したりで、そりや忙しかった。

時代に、飢える人々の食を満たし、生活苦にあえぐ多くの人々を雇用してこの地域に計り知れない貢献をしてきた鏡乃原一帯のサツマイモ産業の終焉だった。

母が八十六歳で逝くまで、「私たちが一番苦しいときを生きて延びて来られたのは鏡乃原の人たちのおかげよ」と、言っていたことを思えば、異臭に怒った自分に何か後ろめたいものを、そのとき感じたことは否めない。

かつて、異臭を運んだ放水路はいま、水が澄んで鯉が

優秀賞 受賞の言葉

喜びと感謝 たま きよし

九月二十日の夕方のことです。帰宅すると留守電の赤いランプが点滅していました。

「どなたからかな？」と言いながら再生ボタンを押しました。

それがなんと文芸思潮編集長の五十嵐さんからの「エッセイ賞」の知らせだったのです。隣の部屋で着替えていた妻も電話の側に飛んできました。そして二人で電話機に耳をあて、再生を繰り返しながら、その留守電を何度も聞き返したのです。あのときの嬉しさは忘れられません。一週間後、正式に「受賞通知」の文書をご送付いただき、再度、喜びを噛みしめると同時に、優秀賞に選ばれたことの重みを実感しているところ



たま きよし

本名 長谷川清
1940年 京城(現ソウル) 生れ
1945年 敗戦により一家郷に居住
10年 引き揚げ父の山村に
1963年 より 美術科教師として
県内 小中学校、美術館、県教育委員会等に勤務
校長を経て2011年 退職
現在・各務原市秘書室で
報誌 総合デザイン
グラフィックデザインに携わる

ろです。誠にありがとうございました。

例えば、私の人生の時々起きた出来事の一つ一つをズームアップすると、その全ての背景に「終戦」と「引き揚げ」という、五歳のときに見た原風景が広がっているのです。今回の「サツマイモ」もそうです。私はこの度の応募を機に「自分にも、子どもや孫に語り継げるものがあるかもしれない」と、六十代半ばにして思い始めています。貴重な啓発と大きな刺激をいただいた「文芸思潮」エッセイ賞のイベントに感謝申し上げます。

でっかい菓子工場もあったし、デンブン工場も方々にあってな、多くの人が働きに来てたんや。それが徐々に需要がなくなつてな、いまは年寄りがわずかにニンジンをつくったり、野菜物をつくったりしとるな。時代も、百姓も、変わって行くんや……」

老人の表情は少しさみしそうに見えた。別れ際に、「あなたの二十年前の話、村のみんなに話しくてな、みんな喜ぶで」

私はこの地に深い困縁を感じ、この地に惚れ、昭和四十五年にこの地の女性と結婚し、この地に居を構えた。

蒸し暑い夏の夜だった。

市内の街並みにその年もデンブン工場からの異臭が流れ始めた。サツマイモからデンブンを生成する過程で出る廃液が放水路に流れ、その下流のある街々に異臭をもたらすのだ。特に風のない蒸し暑い真夏の夜は、悪臭が街の中に滞っていつまでも消えなかった。市民の怒りも頂点に達した。「もう我慢ができない」と住民は叫んだ。私もその中の一人だった。しかし、この異臭は戦後、デンブン工場操業の当初から漂っていたはずである。戦後を抜け出し生活の快適さを求め始めた途端、異臭排斥の声は年々高まっていった。やがて、その最後のデンブン工場は昭和五十年、操業の停止を余儀なくされた。例えば、戦中戦後の苦しい

悠々と泳いでいる。四月には岸辺に咲く桜並木が数万人の花見客を集めている。

現在、サツマイモ栽培を主とする農家はこの地にない。サツマイモ畑のほとんどは住宅地になり、家々の庭や公園の樹木が大木に成長して林立している。大きくうねる丘陵の地に出来たその家並みと緑の風景はそれなりに美しい。でも、私にはその風景のうしろに母と歩いたあの広大なサツマイモ畑とそこにいた人々の姿が見える。

ホップ・ステップ・ジャンプ

あすわ

足羽りよう

「スワースダイ チュナム トウマイ (あけましておめでうございます)

お正月を思いもよらずカンボジアの地で迎えております。

ホップ・ステップ・ジャンプ、ようやくハードルを跳び越せ、家族で息子の結婚式の祝いにやって来ました。パートナーはチャールミングで利発な現地の女性です。ともに草の根の開発協力を携わっています。

人生いろいろ……、本当にそう思います。今年もお健やかであられますように。

一九九七年一月一日」

これは八年前の年賀状です。早いものです。こんなこと

も、懸命に背伸びして理解しようとしてきました。けれど、ここに来て本音と建前がいかにかけ離れていたかを知りました。彼は私たちにことあるごとに話しかけてきました。

「世界はそんなに広くないよ」「だれかがやらなければいつまでたつても世の中は変わらないよ」「地に足をつけて汗を流して、人に喜んでもらえる仕事にかかりたい」

いずれ社会へ巣立っていくのを見送らなければならぬ。親はこどもの成長の過程で数えきれない楽しい思いを充分にもらってきました。子は成人したら社会へお返しする神様からの大切な預かりもの。ひとり歩きをはじめた子のようにしる姿をただただ祈りをもって見つめていよう。たとえやせ我慢であっても……。しかしこんな心境になるまでに、息子と何度も言い合い、親のエゴをいっぱい見せつけました。分らずやでもいい、本音を言えるのが親子じゃないかと思っただけのもの、彼の悲しい顔を見るのは本意ではないのです。子の生き生きしている姿、喜んでいる顔を見ることが、親として最高に幸せなことなのだから。

そんな気持ちで二度日のカンボジア行きを見送りました。今回は生活上のために協力するというNGO(非政府組織)の一員として再びカンボジア入りをしたのです。彼は前年から国連ボランティア選挙監視員としてPKOに参加していました。当時地雷やボル・ポト派などと危険極まりなかったカンボジアの地に送り、親としては肝を冷やし

で悩んでいたのかと、今振り返ってみればその頃が懐かし、ちよっぴり自分が愛おしくなります。

「こどもの人生だから、こどものしたいようにさせよう。それが、悪いことでなければ」

よそ様の事であれば私にもそう言えます。けれどわが子であれば考えてしまいます。エゴであっても、つじつまが合わなくても。だれよりも子の幸せを望むから。ましてや不安材料が多ければ……。

親バカと笑われましょうが私たち夫婦には自慢の息子でした。彼の草の根の考え、行動は、客観的に見て私を啓発する部分が多くありました。第三世界へ向ける姿勢も考え

てきた一年数カ月でした。ようやく無事に戻ってきてほつとしたのもつかの間の三カ月後の事で、二十四歳にひと月前でした。

ここまではようやく息子の考えに手を届かせることができました。が、翌年、彼はまた次のハードルを私の前に置いたのです。結婚というハードルを。思いがけないことに現地の人と結婚したいと言ってきたのです。

息子の結婚……まだまだ遠い出来事だと、それまで考えてもみませんでした。結婚という言葉だけでも大ショックなのに、よりにもよってカンボジアの女性とは。どんなに背伸びしても、思いつきりジャンプしても、彼の気持ちに寄りそうことができません。夢であってほしかった。来る日も来る日も苦しみました。私の頭は、生活のこと、言葉のこと、風俗・習慣のこと、孫のこと、国籍のこと、先方の家族のこと、親の私たちのこと、妹のこと、親戚のこと……。頭に浮かぶのはマイナス思考ばかり。何とかして思い止まってほしくて、彼に訴えました。しかし息子の選んだ人だから、軽はずみに決めたはずはないということは母親としてわかるのです。それだから、それだけに、なおさら。

私の心に差別意識があるのをいなめませんでした。外国人へのそれも東南アジアに対する私の稚拙な人種意識。今まで考えてもいませんでした。そしておぞましい許容範

團がよぎるのです。より日本人に顔・形が似ていればまだいいのという、私の愚かな、でもまぎれもない本音なのでした。世間体を気にするだけのなものでもない。相手が外国人だから反対するというのは、息子への説得理由にはなりません。でも反対の理由は現地の人だからという、それだけでした。理屈ではわかっていても感情がおつつかないのです。そんな目に見える苦勞を背負って生きていなくても、もっと楽な生き方をしてほしいという本音。しかし、気持ちとはうらはらに、彼を理解している気持ちもあるのです。その揺れる心がもどかしく、切なく、ただただ涙があふれてくる毎日でした。

意外なことに夫も娘も初めは驚きはしたものの、本人が決めたことだから反対はしないと言うのでした。これには内心安堵もし、また反発もするのです。二年間の婚約期間を置くからと言ってくれたことが、気分的に助かりました。その間に息子が心変わりしてくれたらと思いつつ、万にひとつもそんなことはあるはずはないと、親だから分かるのでした。

世の中変わった。意識を変えなければついて行けそうもない。分かることは着実に地球単位で物事を考える若者が増えてきているということです。国籍の違いなど彼らからみれば少しも問題ではないのです。

息子は次の年、サハリンへの派遣を命じられ、その途中

ンボジアで冬物の衣類なんて手に入るはずないじゃない、ましてや極寒のサハリンに行くのだから当然よ、当然」と、自分にいい聞かせたりして。

あなたに驚かされ泣かされてから一年半、時が経過するってことは、いつのまにか傷口をやさしくふさいでくれるものですね。あなたが結婚したいと打ち明けたときから、私があがいても、最後には受け入れて、こうするであろうことは分かっていました。あなたの意志が変わることはないだろうと。それなら初めから快く認めればいいと思うのにそれが出来ない。傷つけ合っつくたくたになっただけ、ようやくたどりついたので。

あなたの選んだ人はチャージングでした。氣立がよく利発そうで、きつと努力家で辛抱強い人なのでしょう。

大らかな気持ちで彼女を見ている私自身にほっとしました。だって意地悪する理由なんて何ひとつありませんものね。一週間いっしょに暮らしてみても私の考えに変化がありません。どうってことないわ、案ずるより産むが易しだとすこしばかり日焼けしているだけやないってね——ごめんなさい。なによりも二人の間に私の割り込む隙間のないのに氣づかされました。ふっきましたよ！

寂しさの中にいて、寂しくなんかないと寂しさに抗い、知らずに知らずに寂しさに慣れてしまう。諦めるというのでは悲しく、受け入れるというのでしょうか。そうやってど

わが家に立ち寄りしました。仕事のパートナーとしてフィアンセも一緒でした。一週間わが家で共に生活しました。彼らがロシアへ発ったあと、心が定まりました。

気持ちが変わらないうちに息子に手紙を書き送りました。シヨッキングな彼の結婚話を聞いてからすでに一年半たっていました。

「おかえりなさい。痩せてはいましたが、体調は良いようで安心しました。二年ぶりの再会で本当は手をとって喜びたいところ、素直に体で表わすことができなくて、さりげなく『おかえり』と言っただけでしたね。その上あなたのうしろに初対面のフィアンセがいるのでは、うれし泣きもはばかられます。それよりも、きつと私の第一声を不安げに待っているだろう彼女に、早く笑顔を向けてあげなければと気があせりました。何十年も使っていないカビのはえた英単語を懸命に思いだし、頭の中で組み立てるのだから、感傷に浸るなんてとてもとても。あつけない再会と初対面でしたね。

あなたからの手紙で、彼女もスタッフのひとりとして一緒にロシアへ行くことになったことを知りました。それ以来、せつせと彼女を受け入れる準備をしたり、まだ見ぬ彼女の冬物を用意したりしているのに、苦笑いしてしまいました。『人道的に当然な事よ、彼女は年中暑い国の人、カンドンと自分の漠然と描いていたものから遠ざかっていく。だれに慰めてもらうものではなく、自分で噛みしめ咀嚼していかなばならないのですね。私だっておじいちゃんやおばあちゃんと同じ思いをさせてきたのでしょうか。親って損、あなたも親になつたらきつとわかるだろうと思えます。が、その頃になるともつともつと世の中変わっていきましょうし、国際結婚なんかで悩むなんてことはないでしょう。そう思うとやっぱり親って損！

先々の不安はたくさんありますが、それはあなたたちの問題。その都度、二人でクリアーしていかなければならないのです。私としては、あなたたちを手をかざして見つめて祈るだけです。時間がかかりましたが、私もようやくハードルを飛び越せたみたいです。

お待ちどうさま。 母

追伸 お父さんと里子が彼女のこと、どこかお母さんに似てるね、ですって。」

それから一年後、私たち家族は息子の結婚式に参加するため、カンボジアの地に向かったのです。

国際結婚——息子夫婦は初志貫徹

あすわ
足羽りよう

多くの作品の中から選んでいただけで、驚き、喜び、嬉しく思います。

前々から自分の書いたモノをよそ様に読んでいただくなんて面はゆいと思っており、家族にも見せたことがありませんでした。自分史的なモノは自家生産・自家消費するものと常々考え、日記のように心の赴くままに書きためておりました。いつのまにか六十代も半ば近くになり、そろそろ身辺整理をしておいてもいい年代にきていることを自覚し始めました。

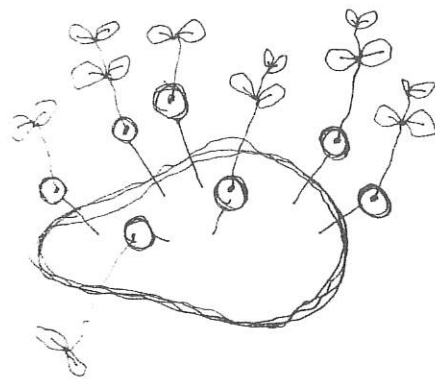
手始めに紙屑化した原稿の整理を思いつき、その中の一編を見つめました。当時の私には人生の最大の事件——息子の国際結婚が降って湧いており、悩まされました。この作品はその時の気持ちを文に綴ったモノで、読み返しては思いのプロセスを自画自賛しておりました。そのうちひとりよがりの文が客観的にわかってもらえるのかどうか、少し冒険がしたくなりました。お目に止まって光栄です。ありがとうございます。

息子夫婦は初志貫徹、孫も二人授かりました。現在日本に帰国し、スーパの冷めない距離で双方つつがなく過ごしています。「案ずるより産むが易し」の諺の通り、今では孫の成長を楽しんでおります。



あすわ りよう

1941年大阪生れ
大阪市在住
主婦



かん ぞう

萱草——わすれ草——

安田ひとし

テレビが映し出した野草を見て「おやつ」と思った。私
が育った奥美濃で「ピーピー草」と呼ばれている草にまず
間違いない。だが、ナレーションでは終始「カンゾウ」。
別称があるはずだと考えて、テレビの前に参考になりそう
な本を持ち出した。

カンゾウは日本古来のユリ科の食草。若葉が美味で初夏
朱色に開花。別名・忘れ草、という説明には一先ず納得し
たのだが、ピーピー草などというイージーな呼び名は出て
いなかった。

番組が終るまでいつときも目が離せなかった草といつて
も、ピーピー草は、葉の形状が菖蒲の若葉に似て細長く、
市街地を少し離れば、どこにでも生えていそうな野草で
ある。

戦時中、私の郷里へ穀物の買出しに押しかけてきた都会
のおばさんたちが、お目当ての買出しができなかったとき
よく摘んでいた記憶があり、テレビの前で私はいささかの
苦味を伴ってこの草を思い出していたのである。

薬屋との兼業農家だったわが家でも、戦況の悪化で薬の
入荷が途絶え、端境期に父に徴用令が届いたあと、食べ物
が底をついた。そのとき一、二度食わされたが、みずみず
しくてうまそうに見えたピーピー草は、加熱すると黴く
な
って苦かった。「蛇草や」といつて吐き出すと、気丈な母
が、減多に見せない悲しそうな顔をした。

おばさんたちが、食える草だと知っていてピーピー草を
摘んでいたのかどうかは分からない。だが、得たいの知れ
ない草でも、食べられるらしいと聞けば、家族のために摘

んで帰らないわけにはいかない飢餓の時代だった。

事典の説明には「古来」とか「美味」などと書いてあったが「まさかあの草が？」と、私はすぐには納得できなかった。だがもし、ピーピー草が、美味と言われるカンゾウなら、蛇草呼ばわりした汚名の挽回は私がしなければならぬ。また何より、当時のおばさんたち（生きておいでかどうか）に「ちゃんとした食草でしたよ」と、教えてあげたい。

そうしたいきさつに、郷愁もちよびり絡んで始めた草探しだったが、予想外にてこずった。植生がわが郷里とさして変わらないというのに、奈良の近郊ではピーピー草はなかなか見つからなかった。地方紙に載っていた食草家に電話をかけた時、植物園を訪ねたりしたが、助言は「どこか山の近くに行けば生えている」と、とりつく島もなかった。

それから三年。諦めかけていた私の前に、ひよっこりと探し物が現れた。偶然通りかかった吉野の入り口にある津風呂湖畔の土手で、ピーピー草の群生に出遭ったのである。それ自体は、さほど珍しくもなく、大した価値がある草でもないのに、群生を前にして意外に気持ちが高ぶった。探した年月と、あのころの大人たちの、地べたを這いまわるような苦勞を思い出したからだ。

艶々した若葉にしばし見とれたあと、一株を引っっこ抜い

ない。田舎で生まれ育ち、郷里を出て五十余年。いまだに都会人になりきれない私もまた、同じきまり悪さを度々経験していた。

二人のやりとりを聞いていたのか、納屋の陰から老婆の倅さんらしき男性が出てきた。私が手にしていた草を一目見たその人は、
「ノカンゾウやね。この辺ではピーピー草で通っています。食えますよ」

身辺にある草なら、地衣の類まで知っていそうな、農家の主的明快なご託宣だった。

「やつと正体を突き止めた！」
いつとき言葉が失っていた私の脳裏に、この草にまつわる二つの記憶がよみがえった。

森鷗外の小説「山椒大夫」に出てくる、安寿と厨子王姉弟に付けられた仮名（けみょう）を思い出したのである。

丹後は由良の人買い一味が名づけたという経緯は気に食わないが、安寿が垣衣（しのぶぐさ）、厨子王が萱草（わすれぐさ）。悪い男たちがつけたとは思えない呼び名だが、理不尽に引き裂かれた母子の、哀れな身の上を皮肉げになぞっている。

残酷な親探し物語の筋は省くが、離別後三十年、筑紫の国守に上り詰めた正道（厨子王）が、母親を探しに訪れた越後のとある農家の庭先で、薙に干された穀物にたかる鳥

て近くの農家に持って行った。

「この草の名を知りませんか？」

庭先にいた老婆に、土の付いた青草の小束を差し出した。一瞬口ごもった老婆は、戸惑った表情をしながら、
「よその人にはナ、私らが呼んでる名を言うたら笑われる」

「笑ったりしませんから、お婆ちゃん教えてくださいよ」

「昔からこの辺では、ピーピー草って呼んでるけど」

「……………」

老婆がはにかむように口にしたのは、私にとってよもやのひと言だった。

カンゾウや忘れ草はいっぱしの植物名だが、引き比べて「ピーピー草」とは何とも子供じみている。だが実は、このおざなりな呼び名こそ、奥美濃と熊野の山峡に、距離を越えて伝わった、いかにも草にふさわしい愛称だったのである。日本中至るところで、ナズナがペンペン草と呼ばれているように。

私の郷里に限らず、歩危に仕切られた山峡には、こうしたアンチヨコと言ってもいいような、素朴な物の呼び名が閉じ込められている。花の名ならシーレンポー（満珠沙華）やブツツリバナ（馬酔木）、チーバナ（茅萱）などだ。

老婆が口籠ったのは、同郷者の間でしか通じそうにない物の呼び名を、よそ者相手に口にする戸惑いだったに違いない。

を追う、目しいた老婆にふと心を留めた。老婆がお経のように唱える仕事歌に耳を傾けた正道。

安寿恋しやほうやれほ

厨子王恋しやほうやれほ

鳥も生あるものなれば

逸う逸う逃げよ

追わずとも

「我が子恋し」を繰り返すすばらしい老婆を、正道が母と確信した瞬間である。

十四歳と十一歳の姉弟が、心ならずもまともな草の名と気付かず、私は長年その草を探していた。それは、深い山や川をいくつも越えた別々の鄙びた山あい、同じ愛称で呼ばれている野の草だったのである。

もう一つの記憶は、「金は要らん」。

農家を訪ね、穀物の売り渡しを請うた、あの頃の買出しおばさんたちに返ってきた、冷たいひと言である。そのあと、おばさんたちが言い合わせたように辿ったのは、ピー草が生えている里山への道だった。道端には農家の豚舎があり、側を通るおばさんたちには信じられない光景が目に見え込んできた。ピカピカの銀飯を食べ残した豚のご一家が、飽食後の惰眠をむさぼるあられもない寝姿だった。

トン様が銀シャリで飽食し、人間どもが草を食って生き延びた時代が、たった半世紀前にあった。豚舎の前で「いくらなんでも酷すぎる」。おばさんたちがそう思ったかどうか分からない。仮にそう思い「何とかならないの？」と訴えたとしても、まっとうに応える世相ではなかった。

半世紀後。WTOの席上で日本の政治家が「米は日本人の生命の糧である。国産米を死守するために外来米は一粒たりとも入れない」と大見栄をきった。票田向けの雄姿？に、買出しおばさんたちの姿が重なり、私の胸の奥をしらけさせた。

日本人の主食が米であることに異論はないが、米はむかし、金銭を紙切れみたいに見下すほど価値が上がり、当たり前のように「ある特定の場所」に偏在した。そんな状況の下、生きるために豚も食わぬ草を食わざるを得なかったのは、特定の場所とは縁もゆかりもない多数の人たちだった。皮肉なことに、当時の草食い人間を救ったのは、今や排斥的になっている、外来のさまざまな食糧（例えば粉ミルクやララ米とか）であった。

「お蔵にとっさりこ、お米がざっくりこ、チューチューネズミがぱっくりこ」

お腹をすかしながら、こんなにあどけない歌を切ない替え歌にして、当時のこともたちは幼い傍観者として、奮闘するおばさんたちの後ろ姿をまなこに焼き付けていた。

優秀賞 受賞の言葉

「ピーピー草」にまつわる長年の思い

安田ひとし

周りを「ニヤリ」「クスリ」させたら楽しいだろうな。近頃そんなことを考え始めていましたので「萱草」は最後のシリアスな作品にするつもりでした。

深刻すぎるものは、周りを緊張させるような気がして「ちょっと読んでみて」とお願いしにくいからです。ゲラゲラ笑わせるのは無理としても、「ニヤニヤ」くらいは——そう思いながらも「ピーピー草」にまつわる長年の思いは、忘れるには重すぎました。

草を探していた頃、十数年ぶりに山椒大夫を読み返していて、偶然気付いた「萱草」。

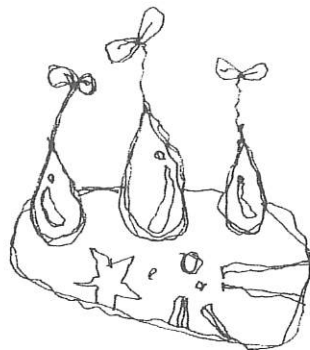
いさかしがびれました。厨子王の仮名（けみょう）が、まさかピーピー草だとは、鷗外も知らなかったのでは？ などと想像しました。

それはさておき、当時の過酷な体験が、昔話のネタで終ればいいのですが、不条理や理不尽なことは今、もしかすると昔以上かもしれないかもしれません。杞憂に終わろうと、飢餓を書いておくのは無意味ではないと、我田引水しています。

ただ、投稿はしたものの、肩肘張りすぎて恥ずかしく、早く忘

その記憶が、たとえ危機存亡の時であっても、いわゆる白く輝く穀物は、お蔵と無縁の輩が「決してあてにするものじゃない」。負の確信に近い思いを、私たちは持たされてしまった。いまや死語になってしまった「飢餓」の二文字と共に、草の名に因んでキレイサッパリと忘れてしまいたいだけだ……。

はにかみが消えたのを見て「吹いて」とねだると、「息が続かんかも」と言いながら、老婆は干からびた唇に、露帯びた草の葉をおし当てた。か細く、しかし冴えた音が、津風呂湖の谷合の澄んだ空気を震わせてピーピーと響いた。見上げていた竜門岳の稜線が、次第に滲んでいった。



やすだ ひとし

- 1934年岐阜県生まれ
- 53 大阪の私大を経て船会社へ
- 63 退職。デザイン室開設
- 99 65歳で閉鎖後朝日カルチャー奈良にて文章修行
- 2004 奈良歴史エッセイ「体感・歴史と伝統」大賞

れたいと思っていました。そこに突然の知らせ！

つたない作品を揃いあげて頂けて、ホンマにうれいす。書いておきたいと思ひながら、冒頭の理由でためらっている話

が二、三あり、改めて見直そうか、と思っています。面白おかしいものを書くことは、言うほど生易しい作業ではないことを思い知らされながら、多くを望まず、型に嵌まらず、ポチポチと続けて行ければと願っています。